
ルナリアン

ふらじゃいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ルナリアン

【Nコード】
N8065L

【作者名】
ふらじやいる

【あらすじ】
教室じゅうが、どよめいた。月から引越してきた奴が珍しかったからじゃない。そいつの頭がハリネズミみたいにとんがったヘアスタイルだったからでもない。先生が連れてきたその転入生が、顔中あざだらけだったからだ——宇宙から地球へやってきた少年と、宇宙へ飛び出して行きたい少年のお話。

教室じゅうが、どよめいた。

月から引越してきた奴が珍しかったからじゃない。そいつの頭がハリネズミみたいにとんがったヘアスタイルだったからでもない。先生が連れてきたその転入生が、顔中あざだらけだったからだ。

「月から引越してきた、真田月兎さなだ・げつとです！ 月出身なんで、地球はちよっと体が重いです！ 慣れないことばかりなんで、よろしくお願いします！」

鼻とアゴと右の頬にバンソーコーをつけたそいつは、見た目の痛々しさを見事に裏切る、元気一杯の挨拶をした。

みんな呆氣にとられている。

どうしてあいつが傷だらけなのか気になっているんだろう。

——僕は知っていた。

僕の中学校は、日本の、ある特別開発地区にある。驚くなかれ、宇宙ステーションに繋がる軌道エレベーターがあるんだぜ。

軌道エレベーター？ 宇宙まで上がることができるエレベーターだよ。すんごく高い。

でっかい木みたいなものだな。あれを見上げるのが好きなんだ。

というわけで、かなりハイテクな都市に僕は住んでいる。

でもさ、どんなに技術は進んでも、人間の頭の中はアナログなんだよね。やっぱりこの学校みたいに千人も同世代の人間がいるとき、いるんだよ。ローテクな奴らが。

学校の成績が芳しくなくて、スポーツにも打ち込めない半端な奴らは、毎日まともな人間を待ち伏せして、嫌がらせをする。暇なん

だよ。

僕？ 僕は自慢じゃないけど、学年で五本の指に入る優等生だからね。もちろんそういう奴らに狙われる役だ。そう、今日の朝も襲われたよ。

毎度のこと、ロッカーであいつらは僕を待ってた。この学校って、一般人の侵入者に対するセキュリティなら万全なだけだな。笑っちゃうよ。

「よう」

市川が話しかけてきた。オールバックで、鼻の下にヒゲ生やした奴なんだが、このヒゲ、高い育毛剤つかってわざわざ伸ばしてるんだってさ。

「ロッカー代払えよ」

もちろんこの学校のロッカーは無料でつかえる。

でも、僕は優等生だからね。こういう言語障害の奴らとはまともな話なんてできやしないから、さっさと携帯出して、クレジットを払おうとした。まあ心の中で、ロッカー代じゃなくてヒゲの育毛剤代だろ、とは言ったけどな。

市川は赤外線受信するためにベルトから自分の携帯を引き抜いて、西部劇の銃みたいにくるくる回した。……かっこいいと思ってるのかよ、それ。

僕が呆れていたときだ。そいつが横から割って入ってきたのは。

「ねえ、こっつてロッカー代かかるの？」

見たことない奴だった。ハリネズミみたいにとんがった頭をした、見るからに頭悪そうな、綺麗な目をしてる。

「あ？ 誰だお前」

低い声ですごみながら、市川が広いデコをハリネズミに近づける。

「あ、もしかして、これってイジメ？」

やっべーこいつ。天然だ。僕は思っ、一歩離れた。

「お前、こいつからカネ取ろうとしてんだろ！」

ハリネズミは何が面白いのか、爽やかな笑顔だった。市川から腹

に一撃食らうまでは。

見事なアッパー。ハリネズミの体がくの字に曲がる。

市川の仲間が二人、後ろからハリネズミの両腕を押さえた。そしてもう一発。

僕はもう二歩下がった。ハリネズミの顔面に肘が入る。見てられない。

落ち着け。こんなことに関わっちゃいけない。先生に見られて、市川の仲間だと勘違いされたらどうする。

僕は前時代的な争いに背を向けて走り出した。

助けを呼ぶ？ いいや。面倒なことになる。大丈夫だ。市川だって限度は知ってるはず……。

それと、市川には後で送金しよう。気の利いたメールつけて。

「おあうっ！」

ハリネズミの悲鳴がして、僕は足が止まった。

大丈夫だよ。空気読めなかったあいつが悪い。そうだ。別に、助けてもらいたかったわけじゃないし。

だいたい僕が戻ったところで、何ができるわけじゃない。

人として？ 非合理的考えはするな。デジタルに思考しろ。

僕は走り出した。

大丈夫、あいつはちょっと痛い目みるだけ。大丈夫だ。

そう自分に言い聞かせながら。

まさか転人生だったとは。僕は傷だらけのハリネズミと目を合わせないようにした。

ハリネズミ頭の真田が誰にやられたかは、すぐにクラス中が知ることになった。

当の本人がまるで笑い話みたいに話したからだ。

僕は気味が悪かった。傷だらけのくせに、どうしてあんなに元気なんだ。もつとしょんぼりしていいはずだ。理屈に合わない。

昼休みになる頃には、クラスのみんなは真田と一線引いた接し方になった。ヒゲの市川ともめた人間とはあんまり関わりたくない。当然だ。

ハリネズミ真田がかわいそうだとは思わない。面倒な付き合いが減って楽じゃないか。

僕もヒゲの市川に気に入られてるから、クラスの低脳たちに下手に話しかけられないで気楽なんだ。

おかげで休み時間も幼稚で下らない会話に付き合う必要もなく、読書で有意義に過ごせる。

「ねえ、朝、会ったよね」

だから話しかけるなって言ってんだろ。ハリネズミが。

みんなに素っ気ない態度を取られるから、僕のところへ来たわけか。

「オレを見捨てて逃げたっしょ」

助けて、なんて言ってないだろ。おい、自分の席でもないのに僕の前の席に座るな。

「ひでー目にあったよ。あのヒゲ、ルナリアン月人の骨格がどんだけ弱いかわからねーんだ。服の下にプロテクター着てなかったら、肋骨ぽつきりいってたって」

プロテクター？ そんなものを着てるふうに見えない。

「あはっ、そんなの着てるみたいに見えないだろ？ 俺が着てるプロテクターは薄い膜状のやつで、強い衝撃で硬質化するんだ。驚きだろ」

へえ。それより、お前が僕の心を読んだことのほうが驚きだよ。

僕はちよっと目をやってからすぐ、本のページをめくった。

「あ、オレ、真田月兎。お星様の月に動物のウサギって書いてゲット。ゲットでいいよ」

聞いてねー。

真田はしばらく黙って、笑顔で僕を見ていた。あんまり気に障ったから、

「ゆーき……、結城」

と名乗ってしまった。

「ゆうき？ それって苗字？ 名前？」

ゆうき・たか
「結城貴。結城は苗字」

「そっか。じゃあタカって呼んでいい？」

「……別に」

なんだろう。こいつ、朝の下駄箱で見捨てて逃げた僕に、なんのわだかまりも感じていないみたいだ。

それに、妙になれなれしいのに嫌な気がしない。変な奴。ルナリアン月人ってみんなこういうのか？

「よろしくな。イッテテ。しゃべりすぎた。あのヒゲ、容赦ないよな」

真田は頬をさすった。

「ヒゲとか言わないほうがいい。市川に目をつけられたらやつかいだから」

「みたいだな。あのヒゲとやりあったって話してから、みんなオレを避けてる」

天然のアホだと思ったけど気づいてたか。でもやっぱりヒゲと言うお前はアホだ。

「あのヒゲ気持ち悪いよな。てゆうかあいつさ、ナマズに似てない？ 図鑑でしか見たことないけど」

僕は目を見開いて歯を食いしばり、顔をそむけた。こらえろ。笑うな。

「あいつ、顔だけ魚類から進化してないよ」

「プッ」

噴出してしまった。

「なあ、賭けようぜ。あいつがエラ呼吸できるかどうか」

この賭けは成立しないと思った。僕はできるほうに賭けるし、きつとこいつも、そうに違いないからだ。

でもそんなことは関係なく、僕はこの教室で久しぶりに大きな声

で笑ったのだった。

ルナリアン
月人の貧弱さには驚いた。普通のペースで歩いていたのに、もう息が上がっている。

僕は体力があるほうじゃない。運動には自信がない。もやし並みだ。そんな僕でさえ、こいつの貧弱さには呆れる。

「乗り物つかって帰ったほうがいいんじゃないか」

真田は息を整えるのにしばらくかかった。

「リハビリだよ。リハビリ」

「お前って、地球ははじめてなんだろう？ リハビリっていうか……」

「オレはこの星で生まれた生き物だ。何万年も前にな」

変な奴。アホみたいなこと言うかと思ったら、妙に哲学っぽい話もする。

「でも正直、プロテクターがなかったら一時間も普通に動けない。それを過ぎたら何週間も重力室で寝たきりさ。免疫も弱いらしくて、家に帰ったらまず全身を洗浄しないといけない。週に一回病院で身体検査。これから何年もだぜ」

真田が「湖が見たい」というから学校近くの人造湖へやってきたのだが、もうそんな余裕はないみたいだ。栈橋の手すりに背中をぐったりと傾けている。

ヒゲの市川にやられた顔の傷は痛々しかったが、もう腫れはひいていた。見た目ほど酷いケガではないらしい。

「どうして地球に来たの？」

よくぞそれを訊いてくれました！ ってな感じで元気に話し出すかと思ったら、真田は素っ気なかった。

「理由なんてないさ。来たかったから来た」

僕が腑に落ちないような顔をしていたからか、真田は続けた。

「オレは物心ついたときから月にいた。それが当たり前で、幸せなことだと思ってた。でもあるとき地球ってのを知った。立体映像で

地球の色んな景色を見てたら、なんだ、あっちのほうが楽しそうじゃん、って思った。それに、俺たち人間ってこの星で生まれたっていうじゃないか。だから、家族と離れるのはちょっと寂しいけど、成長期を過ぎてから地球に戻るのは体的にかなり面倒らしいから、今のうちに戻るところって。で、今こうして動悸息切れ状態ってわけ。ほんととはさ、地球に来てからもう一年過ぎてんだ。最近やっと退院して、外を歩けるようになった」

僕はわかったようにうなずいて見せた。何か大変なんだな、月人ルナリアンって。重力が地球の六分の一の月で生まれ育つだけで、こんなに体が弱るものなのか。

「もしかして今、一人暮らし？」

「いや、ジーちゃんとバーちゃんがいる」

栈橋の手すりの上で腕を組んだ僕は、湖の向こうの街並みから突き出して天高く伸びている、軌道エレベーターを眺めた。果てしなく大きな木だ。

空の上、雲に隠れるところまで見上げて、つぶやく。

「軌道エレベーター、どうだった？」

「え？ 何が？」

真田はすっかり疲れてる。また汗を拭った。

「軌道エレベーター乗ったんだろ？」

「あー、うん」

「景色とか、すごいんだろ。静止軌道から地球に落ちていくんだから」

「いやあ、体調悪くて、ステーションから地上までずっとカプセルで寝てた」

「んなつ……、もったいない！」

「景色だったら地上で間近に見たほうがいいじゃん。昇降駅から出たときはほんと感動したぜ！ 地球の匂いっていうの？ 妙になつかしい感じなんだよな」

ようやく息が整った真田は、僕の横に立ち上がった。

「やっぱすげーよなあ！ いい景色！ 水の匂いにするっ」

真田はそう言うが、人工林に囲まれた素っ気ない湖だ。対岸に見えるのは高いビルの群れだし、見慣れている僕には何の感慨もない。このあたりは火星の地球化のための実験地区でもある。人の手が入っていないまっとうな自然なんて、空くらいだ。

「あのさ、月の学校って、修学旅行で火星に行くって聞いたけど」
「うん、三年に一回な。三学年全員で。オレが中一のときがちょうど旅行の年だったからさ、行ってきた。だから今年は地球で二度目の修学旅行ってわけ。いいだろ」

正直修学旅行なんて微塵も嬉しいと思わないけど、火星に行けるのは羨ましい。宇宙旅行はずいぶん安くなったけど、それでも火星なんておいそれとは行けない。月の学校って、どんだけ補助金もらってるんだろう。

「どうだった？ 火星」

真田は空を見上げ、眉を上げたり下げたりした。なんか嫌な予感がする。

「つまんなかった」

あっさり言いやがって。人類があそこに到達するまでにどんな困難を乗り越えていったか知ってるのか。

「なんかバカでっかいテントばっかで、見るもんなんてないぜ。大気をどうにかするプラントで聞いたこ難しい授業も果てしなく眠かったし。ガイドの人にやっと施設の外に連れ出されたと思ったらさ、なんにもない砂地を指差して、『これが有機化された大地です！』って興奮気味に言うわけ。みんなポカーンとしてたな」

ははは、と真田は笑って、深呼吸した。

ホログラフィ・ルーム

「三次元映写室で地球の擬似体験していたほうが楽しいよ。そりゃ、初めて見る本物の空には感動したけどさ、みんな、地球に行きたいってグチってた。オレは火星に行って、ここに来ることを決断したんだ。オレみたいにとんちんかんに来る奴ってあんまないけどな」

真田は湖の水面を愛でるように眺めていた。

僕は軌道エレベーターを見上げた。

僕にとってあの巨木は、地球脱出のための手段だった。

いつか、この狭苦しい星から抜け出して、果てしなく広がる宇宙へ飛び出して行きたい。

そのために僕は良くもない頭に無理に知識を詰め込んで、優等生という地位を得たのだ。

良い大学へ行き、宇宙省へ就職、月面基地で三年ほど実務経験を積み、テストを受けて国際火星開発機構へ派遣されるか、宇宙関連の国際公務員になる……なんてことを考えていた。

真田の話を聞いて、正直僕の足元は揺らいだ。平静を装っていたが、僕は酷く動揺していた。

僕は空へ行つて、いったい何がしたかったんだろうか。本当に大事なところを、僕は今まで考えていなかったのだ。

「よおつ、優等生！」

後ろから声をかけられる。驚いて、僕は振り返った。聞きなれた嫌な声。ナマズの市川だ。

岸边に近づいてくる市川は、朝よりも大勢の仲間を連れていた。五、六、七、八……、人数を数えていくごとに背筋が寒くなっている。

僕は先ほどの動揺も相まって、心の中で市川に毒を吐くことすらできなくなっていた。ああ……、今度は僕も真田みたいにアザだらけになる。

「ロッカー代がまだだぜ」

忘れていた。ちくしょう、昼休みに送金しようと思ってたのに、真田との無駄話ですっかり。

「とんがり頭も一緒か。お前のせいで生活指導のクソ親父に見つかつて、さんざん搾られたぜ。おかげで一週間の停学だ」

そんな話は聞いてない。クソッ、なんてこった。

「どうやらお前ら、グルだったみてえだな」

「え？ いや、ちがっ……」

僕が否定しようとしたときだった。

「ウオオオオオッ」

真田が雄叫びを上げながら、ナマズに向かってタックルをかました。虚を突かれて、ナマズ市川が顔に似合わない高い悲鳴を上げながらすっ転ぶ。

「逃げろ、タカっ！」

真田はマウントポジションから市川の顔に一撃加え、僕に振り返って叫んだ。

僕は動けなかった。

どうしてだ。どうしてだ月人^{ルナリアン}？ お前は阿呆か。そんな傷だらけで、こんな大人数相手じゃ何したってすぐやられるに決まってるのに……。

ほら、もう簡単に市川の足蹴りで吹っ飛んでる。周囲の仲間たちが真田の周りを固める。朝みたいに残ろから両腕をつかまれた。

市川がゆっくりと近づき、真田の腹にアッパーを食らわせた。頭が下がったところに頭突き。オールバックの市川は、その広いデコの硬さで有名だった。

「い……、市川！ いや、市川さん！ やめてください！」

僕は精一杯の勇気を振り絞ってリンチ場に近づいた。

「そいつ、最近月から地球に引っ越してきたんです！ 月の重力は地球の六分の一で……いや、あの、だから、体が凄く弱いんです！ これ以上痛めつけたら本当に死ぬかもしれない！」

市川には僕の話など耳に入らないらしい。顔面にパンチ、足にキック、腹に膝蹴り……。ここで、真田は血を吐いた。確実に肋骨を数本やられている。

「しっかり押さえてろ！ 狙いがズレんだろがッ！」

市川に一喝されて、真田をつかまえている仲間の二人が緩めかけていた手を握り直した。二人の少年の顔は青ざめている。彼らもやりすぎだと感じているのだ。ほとんど白目の真田に、もう抵抗する力がないことは明らかだった。

「市川さん、あいつの言ったことは本当っす。これ以上やったらヤバ……」

市川の後ろにいた奴が止めようとするが、慌てて口を塞いだ。振り返った市川が、制服の胸ポケットから小型のナイフを取り出したからだ。

完全にキレてる。市川は、真田を殺すつもりだ。

「つ、付き合いきれねえ……」

市川の取り巻きも引いている。真田をつかまえていた二人も手を離し、市川の周囲から離れた。他の人間もゆっくりと後ろ歩きで離れていく。

「クッククク……ハハハハハ」

仲間たちが離れていくのを市川は咎めもせず、笑っていた。今、奴の視界には真田しかない。

毒蛇に今にも飲まれそうな瀕死の兎。そんな光景だった。

真田は膝を地面につき、虚ろな目で市川を見返している。

周囲はもう薄暗くなっていた。ゆっくりと、市川の影が真田に近づいていく。

僕の膝はがくがくと震えて、頭の中は真っ白だった。何もできない。何をしたらいいのかもわからない。

——そのとき、湖に光の筋が走った。

軌道エレベーターの昇降車だ。スペース・カーもの凄い光を発しながら上空へ上がっていく。

何度も見た光景だ。夕闇に光る軌道エレベーターを見ることが、僕は一番好きだった。

あれを見ながら何度も決意した。

ここから飛び出す。

ここから、飛び出す。

——どうして？ どうしてだって？

真田と同じだよ。行きたいから。ただ、行きたいからだ。

物心ついたときから地球にいた。そしたら、もっと広い世界があ

ることを知った。果てしなく広がる宇宙。

毎日軌道エレベーターを見上げていたのは、ここから逃げ出したかったからじゃない。あそこへ行きたかったからだ。

それを証明する。

ルナリアン、お前と同じだってことを。

さあ、――飛び出せ。

飛び出すのは、今だっ！

市川の眼中に僕はいなかった。もしかしたら、存在さえなかったかもしれない。僕の横からの体当たりはまったくそれを予期していなかったナマズにとって最高の不意打ちとなった。そう、透明人間にでもやられたかのような。

市川は転がって、そのまま湖に落っこちた。地味な音を上げながら。

僕は岸边で少しぼんやりしてから、はっとして真田に駆け寄った。

「大丈夫か？」

「クッ……ハハハハハッ！」

真田は地面に背をつけ、腹を抱えて笑い出した。どうやら、意識を失うほどの怪我ではないらしい。薄膜の^{スキンタイフ}プロテクターのおかげだろうか。

しかし、見た目には酷い。大仏みたいに顔が膨れ上がって、口や鼻から血が流れている。

「ナイスアイデアだよ、タカ。ナマズは水の中のほうが似合ってる」
瀕死の中でさえ軽口を叩くこいつに、僕は少し頭にきた。

「ふざけんな！ お前、無茶しすぎなんだよ！」

「アハハハ……ふう……」

真田はようやく見た目どおりに力なくため息をついた。救急車を呼ぶべきだろうか。不安になって、ポケットの携帯電話に手を伸ばす。

「星は……、やっぱり月で見たほうが綺麗だな」

ほんとに呆れた奴だ。こんなにボロボロなのに、夜空の星を眺め

てる。

「お前、あんなことして、ほんとに死ぬ気か？　ルナリアンって、みんなお前みたいに無謀な奴ばかりなのか？」

「あはは。悪かったな、迷惑かけて。俺ってさ、前しか見えないタイプだから。ルナリアンの沽券に関わるから言っとくけど、月じゃあ変人扱いされてたよ」

「……それを聞いて安心した。体は大丈夫か？　救急車呼ぶぞ」

「必要ないよ。詳しく話すと長いから省くけど、俺の身体状態は携帯電話と保護膜プロテクターでモニターされてるんだ。もう少ししたら、あっちから来るだろう。地球にいるルナリアンってのは、絶滅危惧種並みに過保護な扱いを受けてんのさ。ほんととはボディ・ガードもいたんだぜ。窮屈だから、文句言って外してもらったけどな」

話しながら、真田が体を起こす。視線が湖のほうに据えられたのに気づいた僕は、真田の視線を無意識に追った。

全身ずぶ濡れのナマズが水辺に立っていた。綺麗に固めていたオールバックはぐしゃぐしゃになって、広い額にくっついていてる。

不幸中の幸いだったのは、その手にナイフがなかったことだ。湖に落としたんだろう。

「てめえら……殺す！　ぶっ殺してやる！」

一步一步、地面に怒りを突き刺していくかのように市川が歩いてくる。

「ハハハ、しぶといねー」

「笑ってる場合か！」

真田はそれでも笑いを止めなかった。

すると、真田は左手首の腕時計の盤面を指でなでた。字を書いているようなくさだ。

あ、と僕は声を漏らした。真田のハリネズミみたいな頭髮が張りをなくし、柳の葉のように垂れた。

「これを……か、貸してやるよ……」

真田は震える手で僕の左手首に腕時計をはめた。いや、良く見る

と腕時計ではなかった。なんだ、これは。

「プロテクターの……着脱装置だ」

言って、真田が盤面に指を走らせると、僕の全身に今まで感じたことがない刺激が走った。心地よい痺れと、水に濡れたかのような感触、そして、妙な安心感。

頭の髪がざわつく。手で触ると、ハリネズミみたいに逆立っているのがわかった。

「そのプロテクターは……装着者の身体状態に応じて……飛躍的に強度が上がる。も……クツ、元々、木星圏入植時のための次世代型宇宙服として開発……されて、軍用アレンジ……されたものなんだ。つまり……、ルナリアンの俺が使ってちょうどいい仕様ってこと……がはっ……はあ、はあ……」

プロテクターを脱いだ真田に、さっきまでの余裕はなかった。だが、苦しそうな目とは裏腹に、口元は微笑んでいる。

「タカ……、こ、殺すなよ。ハハ……、マジでな」

「オラアアアアアアッ！」

真田の声に重なるように市川の怒声が押し寄せ、キレたナマズは頭から僕の腹に突進してきた。

「？」

僕は後ろに倒れることを予測して目を閉じた。が、腹に感じた衝撃は、子猫になでられたぐらいの感触でしかなかった。

市川は飛びのいて、歯軋りしながら、今度は僕の胸に蹴りを入れた。

僕はまばたきした。小石を当てられたような感じだ。

さすがの市川もこの異変に気がついたようで、一步後ろに下がった。しかし、表情は怒り狂ったままだ。

僕は手元に転がっている手のひらの大きさの石をつかんだ。

市川に当たらないように注意しながら、市川の立っているすぐ横の地面に向けて石を投げ放つ。

それはまるで大砲のようだった。

ナマズのそばの地面は一メートルぐらいの半球状にえぐれ、土砂が市川の顔面に降り注ぐ。

地面にバウンドした石は勢いを止めず、湖の水面の上を駆けていった。数え切れないほどの波紋を作って。間違はなく新記録。もしかしたら、向こう岸にまで行ったかもしれない。

すごい。スキнтаイフプロテクター膜状の保護服……、僕のお気に入りの科学関連のニュースサイトでは次世代の簡易着脱式衣服程度にしか語られていなかったのに、こいつは想像以上の機能だ。

砂埃が消えた後に現れた市川表情は、哀れなぐらい恐怖に脅えた泣き顔だった。

僕は再び手ごろな石を拾い上げた。

「消えろ。次は当てるぞ」

「ヒッ……」

市川が尻餅をつき、四足でめいっばい地面を削りながら逃げている。

まるで小動物のような素早さで、市川はあっという間に僕らの視界から消えた。

「ハッ、アハハハハハ！ ……グフッ」

「バカ！ 笑う前にプロテクターを付け直せ！」

真田は僕に一喝されてすぐに着脱装置を取り外し、付け替えた。

僕の髪は元通りに、真田はまたハリネズミになる。真田の表情がいくらか穏やかになったのを見て、少し安心した。

「タカ、やっぱりお前面白いよ。さっきのセリフ、西部劇のガン・ファイターみたいだったぜ！」

「う、うるさい」

思い出すと恥ずかしくて顔面が熱くなる。プロテクターの力でちよつと高揚してたとはいえ、確かにアレはカッコつけすぎだった。

ああ恥ずかしい。

「……ありがと、な」

真田が急に改まって礼を言ってくる。ちよつと驚いた。

「逃げる、とか言ってカッコつけたけどさ、朝みたいに放って置かれてたら、死んでたかもしれない」

遠くからサイレンの音が聞こえてきた。だんだん近づいてくる。林道の先に赤い光が点滅しているのが見える。救急車だ。

思えば、市川が湖に落ちた後、僕は真田の負傷に動転して先のことを考えていなかった。

市川が水から上がって再び僕らを襲いに来る。そのことを。

真田はただ寝そべって星を眺めていただけのようで、実は冷静に考えていたのだ。プロテクターがなかったら僕もどんな目に遭っていたか知れない。礼を言うのは僕のほうだ。

しかし、何より……

「……俺も、お前に感謝してるよ」

サイレンの音が次第に大きくなっていくから、僕は話しやすかった。

「逃げたくなかったから、さ」

「え？」

真田は不思議そうな顔で僕を見た。僕は、高い、途轍もなく高い軌道エレベーターの巨木を、いつものように見上げた。

「俺にも、行きたいところがあるんだ」

軌道エレベーターを光り輝く昇降車が昇っていく。まるで夜空に星が昇っていくかのようなようだ。

「え？　今、なんだった？」

鳴り響くサイレンに眉を曲げ、片耳に指を突っ込んでいる真田を見て、僕は笑った。

僕に釣られて、真田も笑いはじめた。ボロボロのくせに。

サイレンが止まるまで、僕たちは笑いつづけた。

(後書き)

お読みいただきありがとうございます。
よかったです感想いただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8065/>

ルナリアン

2010年10月8日14時46分発行